

否定疑問文の解釈とその周辺

松 尾 文 子

0. はじめに

本論では、'bias' という観点から否定の yes-no 疑問文の解釈について述べ、さらにそこでわかったことを応用して、陳述に対する応答に用いられる yes-no 疑問文の短縮形に関して、および、否定の疑問文と否定の平叙疑問文との違いを考察していく。

1. yes-no 疑問文の bias

yes-no 疑問文には肯定の疑問文と否定の疑問文とがある。疑問文が、肯定、否定のいずれの答をより多く予想するかを 'bias' (偏り) という。肯定の疑問文は一般に中立的、あるいは否定の bias をもち、否定の疑問文は一般に肯定の bias をもつとされる (太田 1980、村田 1984)。中立的とは、疑問文が命題内容の真偽を尋ねているが、その真偽については中立的であり、yes ないし no のいずれかの答を期待してはいないということである (村田・成田 1996: 7)。

(1) Did you go there? (村田 1984: 9)

(2) Didn't you go there? (ibid.)

村田によると、(1)には (i)「そこへ行きましたか」[中立的含意] (ii)「そこへ行ったのですか (行かなかったんだろう)」[否定的含意] の解釈がある。(2)には (i)「そこへ行きませんでしたか」[否定的含意] (ii)「そこへ行ったんじゃないのですか (行ったんだろう)」[肯定的含意] の解釈がある。(1)の意味の裏には「おそらく行かなかったんだろう」という含意が、(2)では「おそらく行ったんだろう」という含意が潜み、いずれの解釈をするかは文脈により決まる。

Swan (1995: 335) でも同様に、否定の疑問文には話し手が肯定の信念の確認を求め、yes の答を期待する解釈 (Isn't it true that ... ?) と、否定の信念の確認を求め、no の答を期待する解釈 (Is it true that ... ?) とがあるとする。

Quirk et al. (1985) では、否定の疑問文は否定指向 (negative orientation) をもつとする。

(3) a. *Can't you drive straight?*

b. *I'd have thought you'd be able to (drive straight),*

c. *but apparently you can't (drive straight).* (Quirk et al. 1985: 809)

(3a) では、話し手の肯定的な態度と否定的な態度とが結びついている。肯定的な態度は (3b) に示される *old expectation* (古い期待) で、否定的な態度は (3c) に示される *new expectation* (新しい期待) である。話し手はもともと肯定の答を期待していたが、新たに提示された証拠から、答は否定だと考えていることになる。

Huddleston & Pullum (2002: 867) では、話し手が別の答よりある答の方を好む傾向があるような疑問文を *biased question* とよび、肯定の疑問文を *neutral question*、否定の疑問文を *biased question* であるとする。さらに、否定の疑問文は通例 *strongly biased* であるとする (883)。

(4) *Doesn't she like it?*

(Huddleston & Pullum 2002: 879)

(4) を発話するのに適切な文脈のひとつとして、彼女の態度や言葉から「それが好きでない」ことがわかり、話し手がそのことを確認するためにこのように発言する場合が考えられる。この文脈では、*bias* は否定 (*She doesn't like it.*) である。

ところで、*bias* を決定する重要な要素として極性表現がある。極性表現には *positively-oriented-item* と *negatively-oriented-item* とがあり (Huddleston & Pullum 2002: 881)、たとえば前者には *some*、*already* などが、後者には *any*、*yet* などがある。疑問文に極性表現が含まれる場合、その表現が肯定極性表現であるか、否定極性表現であるかに応じて、疑問文はそれぞれ肯定、あるいは否定の *bias* をもつ。否定の疑問文の *bias* の解釈は、その文に含まれる極性表現による *bias* の方が優先される (太田 1980: 624-625、村田・成田 1996: 8)。

(5) a. *Didn't someone call last night?*

b. *Surely someone called last night.*

(Quirk et al. 1985: 809)

(5a) は (5b) に示されるような肯定の *bias* をもつ。

2. *bias* の種類

Huddleston & Pullum (2002) は、*bias* を次の 3 種類に分類している。

(A) epistemic bias : ある答が正しいものであると話し手が考えている、期待している、知っているということに関連する。‘what is’、あるいは、‘what now appears to be’、すなわち、現在の状態・事態。

(6) (=4) *Doesn't she like it?*

(Huddleston & Pullum 2002: 879)

(6) では、epistemic には否定の答 (*She doesn't like it.*) への bias が見られる。

(B) deontic bias : ある答が正しいものであるはずだと話し手が判断している。‘what should be’、あるいは ‘what I previously thought to be the case’、すなわち、あるべき状態、起こるべき事態、あるいは、以前はそうだと考えられていた状態・事態。

(7) *Aren't you ashamed yourself?*

(Huddleston & Pullum 2002: 880)

(7) では、肯定の答 (あなたは恥ずかしく思うべきだ) への deontic bias が見られる。それと同時に、否定の答 (あなたの振舞いからすると、恥ずかしく思っていないようだ) への epistemic bias も見られる。

(C) desiderative bias : 話し手はある答が正しいものであって欲しいと望んでいる。deontic bias と大きく違わない。

(8) *Can I have some more ice-cream?*

(ibid.)

(8) では、肯定の答への desiderative bias が見られる。また(6)でも、‘it’が話し手に責任を負わせられるもの (たとえば話し手が描いた、あるいは選んだ絵) である場合、同様の bias が見られる。

さらに、bias には程度の差がある。(6)を例にとると、‘*She doesn't like it.*’ということに対して、話し手が少し疑いを抱いている場合もありうるし、大きな確信を抱いている場合もありうる。前者の場合、否定の bias は弱いが、後者では強くなる。

なお、epistemic bias は前節で述べた new expectation に、deontic bias と desiderative bias は old expectation に該当するといえる。さらに、否定疑問文の場合、deontic bias は常に肯定である。deontic bias は「ある答が正しいものであるはずだ (must)」と話し手が判断している

ことに関する bias で、「正しいものであるはずがない (cannot)」はありえない。

次節以下で、否定疑問文の epistemic bias が肯定の場合と否定の場合を見てみよう。

3. epistemic bias が肯定の場合

epistemic bias が肯定の場合を見る。次例は、話し手が病院の待合室で以前出会ったことがあるような気がする女性を見かけて受付で名前を聞いてみたが、その名前には心当たりがなかったという状況での会話である。

(9) "... I'm sure I don't know her, but I just couldn't shake the sensation that we had met before. She gave me a creepy feeling. Isn't that odd?"

(M. H. Clark, *Let Me Call You Sweetheart*)

話し手はその時のことを奇妙だと思っており (epistemic bias)、また奇妙であるはずだと判断している (deontic bias)。ここでは、話し手は相手に同意を求めている。

次例は、法律事務所の所員の Nina が弁護士の Mitch に彼のクライアントの Mr. Mulholland から請求書のこと連絡があったことを告げる場面である。

(10) Nina: Mr. McDee! Uhm, Mr. Mulholland's called twice about this bill again.

Mitch: Tell Mr. Mulholland to take this bill and ... No, wait a minute, wait a minute.

Just ... Isn't he just up the street?

Nina: Yes. In the Cotton Exchange.

(*The Firm* [映画台本])

Mitch はクライアントのオフィスが通りを少し行った所にあると思っており (epistemic bias)、またそのはずだと判断して (deontic bias)、Nina にその旨を確認している。それに対して、Nina は yes と肯定の答をしている。

次例は、法廷で弁護士が被告人の一人である医者に尋問する場面である。

(11) Concannon: ... You were her doctor?

Dr. Towler: Yes.

Concannon: Say it.

Dr. Towler: I was her doctor.

... (略)

Concannon: ... Uh, and try to keep your answers down to three words. You were not

part of a group, you were her anesthesiologist. Isn't that so?

Dr. Towler: Yes.

(*The Verdict* [映画台本])

弁護士はその医者が彼女の医師団の一人ではなく、麻酔担当医だったとすでに知っており (epistemic bias)、またそのはずだと判断して (deontic bias) 確認している。それに対して、医者は yes と肯定の答をしている。

確認や同意を求めるのに助動詞 wouldn't を用いることで、話し手の主張を控えめにする場合もある。次例では、話し手の姪の Lucy はアルコール中毒のうえ、飲酒運転で事故を起こしたので逮捕されるのではないかと心配している。それに対して、叔母である話し手は治療センターに入ることを (this で示されている) を勧めている。

(12) "Lucy, with a DUI (=driving under the influence) conviction you're likely to have to do this anyway as part of your sentencing. *Wouldn't* it be better to decide on your own and get it over with?"
(P. Cornwell, *The Body Farm*)

話し手は姪が自分で決断して早く問題を終わらせた方がよいと思っているし (epistemic bias)、その方がよいはずだと判断している (deontic bias)。話し手は姪を説得し、話し手自身の意見に同意することを求めているが、wouldn't を用いることで自分の主張を和らげている。

次も同様の例である。法廷で弁護士が被告人に尋問する場面である。

(13) Molto: Do you have anything you want to tell this grand jury concerning the death of Carolynn Polhemus?

Rusty: On the advice of counsel, I decline to answer.

Molto: *Wouldn't* it be fair to say, Mr. Sabich, that you were rather well acquainted with Ms. Polhemus?
(*Presumed Innocent* [映画台本])

話し手は被告人と Ms. Polhemus の関係についての証拠をすでに握っていて、二人は親密な関係にあったと思っており (epistemic bias)、またそのはずだと判断して (deontic bias)、その旨を確認している。

deontic bias が極端に強くなると、修辞疑問文に近くなる。次例は、Dallas 警察の警官殺しの容疑者が Kennedy 大統領暗殺事件と関係がありそうだというニュース速報を聞いての発話である。they は警察を指す。

(14) Patron 1: (cries) They ought to just shoot the bastard!

Patron 2: They should give him a medal for shooting Kennedy. *Don't you*
all know what Kennedy did to this country? (JFK [映画台本])

話し手は誰もが Kennedy がアメリカという国に対してしたことを知っていると思いい (epistemic bias)、またそのはずだ、いや、そうに違いないと判断している (deontic bias)。「Kennedy がこの国に対してしたことを、君たちみんな知らないことはないだろう (いや、知っているはずだ)」と、修辞疑問文の色彩を帯びる。

以上のように、epistemic bias、すなわち、話し手の new expectation と deontic bias、すなわち、話し手の old expectation が一致する場合、否定疑問文は話し手が相手に同意を求めたり、確認をしたりする機能をもつ。そして、そうあるべきだ、あるいはそうに違いないという話し手の deontic bias が強くなると、(14)のように修辞疑問文に近い機能をもつようになる。

4. epistemic bias が否定の場合

epistemic bias が否定の場合を見てみよう。次例は、妹が姉を家まで送って来た場面である。車中での話の続きがあるから、妹は車を降りて家に入ってくると姉は思っていた。車から降りようとしなない妹に対する姉の発話である。

(15) She opened her door and looked surprised when I made no move to get out of the car.
“Aren't you come in?” (P. Cornwell, *The Body Farm*)

姉は話の続きがあるので当然妹が降りて家に入ると思っていたが (deontic bias)、現実には妹は車から降りようとしなない (epistemic bias)。予想外のことが起こり、話し手は驚いている。

次例は、私立探偵の Lomax のオフィスに男が突然入って来た場面である。

(16) Lomax: *Don't you knock?*
Nordic: Where's your secretary?
Lomax: Out. (The Firm [映画台本])

話し手は他人の部屋に入る時には当然ノックすべきだと考えているが (deontic bias)、Nordic という男は実際にはノックせずに入ってきた (epistemic bias)。このことを話し手は非難している。

次も話し手の非難の気持ちが表されている例である。Raymond は検事の選挙戦を戦っている。その最中に部下の検事である Carolyn が殺された。選挙戦を有利に進めるために、投票日

までに犯人を挙げるように地方検事主席検事補の Rusty に命令する。

(17) Rusty: Mac's got more than she can handle already, Raymond. Let me remind you, we lost two key P.A.s (=prosecuting attorney) in one day. And all you got time for is the damned election.

Raymond: Shit. Oh, for Christ's sake, I-Fuck the office!! Don't you understand what's happening here? If you don't find me a killer, there is no fucking office! Now, you listen to me. I want you right on top of Carolyn's case, do you understand? (Presumed Innocent [映画台本])

話し手は、Rusty は局の現状をわかっているから犯人捜査に協力するはずだと思っていたが (deontic bias)、現実には手一杯だという理由で断られて (epistemic bias)、相手を強く非難している。

次例では、話し手の困惑と失望が表されている。客が注文したサラダを残しているのを見たウェイトレスの発話である。

(18) "Why, honey, wasn't your salad all right?" She was sincerely distressed. "It was fine," I assured. (P. Cornwell, *The Body Farm*)

ウェイトレスはサラダがおいしいはずだと考えていたが (deontic bias)、客がサラダを残しているという証拠を目の当たりにしておいしくなかったのだと結論付け (epistemic bias)、このように発言する。話し手のウェイトレスはその店のサラダの味に「責任がある」と考えているから、当然サラダが客にとっておいしくあって欲しいと望んでいる。すなわち、2 節で述べた desiderative bias も deontic bias と同様に肯定になる。

このように epistemic bias が否定の場合、なぜ話し手の驚き・非難・困惑・失望のような感情が表されるのであろうか。

Lyons (1977: 765) は、否定疑問文では命題 P が真であるという話し手の以前からの信念と、否定命題 ~ P が真であるということを示すような現実の証拠との間にまさつ (conflict) が起こるとする。

また Leech (1983: 168) では、否定疑問文に関して次のように述べられている。

(19) Didn't she buy any flowers? (Leech 1983: 168)

否定疑問文では、二つの対立する期待 (two contrasting expectations) を表す。1つは取り消された期待 (cancelled expectation) で、「彼女は花を何本か買った」ということ、もう一つは現実の期待 (actual expectation) で、「彼女は花を買わなかった」ということである。

Lyons のいう「まさつ」や、Leech のいう「二つの対立する期待」が話し手の驚き・非難・困惑・失望のような感情につながる。すなわち、起こると思っていなかったことが現実に起こってしまった、あるいは、そうあるべきだと思っていたのに現実はそのようなことがなかったという矛盾から、話し手はこのような感情を抱くのである。Quirk et al. (1985) でいう old expectation と new expectation との不一致、Huddleston & Pullum (2002) でいう deontic bias と epistemic bias との不一致が、話し手にこのような感情を生じさせることになる。

5. 応答として用いられる疑問文

yes-no 疑問文の省略形 (short question) は、会話の応答で用いられることがしばしばある。この型の疑問文は、情報を求めるものではなく、今述べられたことに対して聞き手が何らかの反応を示していることを表す (Swan 195: 477)。陳述とそれに対する応答を肯定形か否定形かで分類すると、4つのタイプが考えられる。なお、肯定の bias を (+)、否定の bias を (-) で記す。応答に用いられる疑問文の bias は epistemic bias である。

(A) 肯定陳述×否定応答 (+) × (+)

(20) 'It was a lovely concert.' 'Yes, *wasn't it?* I did enjoy it.' (Swan 1995: 477)

(21) 'Her performance in Rigoletto was outstanding.'
'Yes, *wasn't it?*' (Quirk et al. 1985: 810)

(22) 'Their daughter is very clever.' '(Yes,) *Isn't she?*' (ibid.: 812)

このタイプの疑問文は下降調で発話され、話し手が相手の見解に同意していることを示す。¹ (22) の応答は、'I agree' の含意があるとされる。否定疑問文は一般的に肯定の bias をもち、肯定陳述のもつ肯定の bias と一致する。すなわち、肯定陳述で表される見解と否定の応答で表される話し手の見解が一致するので、話し手は相手の見解に同意していることになる。yes が共起していることに注意されたい。

(B) 肯定陳述×肯定応答 (+) × (-)

(23) 'John likes that girl next door.' 'Oh, *does he?*' (Swan 1995: 477)

②4 'I've got a headache.' 'Have you, dear? I'll get you an aspirin.' (ibid.)

このタイプの疑問文は上昇調で発話され、話し手のさまざまな程度の驚きを表す。肯定陳述の bias は肯定で、肯定の疑問文の bias は一般的に否定である。肯定陳述で表される相手の見解と肯定の応答で表される話し手の見解の間にずれがあるので、話し手の驚きを表すことになる。②3では、驚きを表す間投詞 oh が用いられていることに注意されたい。

(C) 否定陳述×否定応答 (-) × (+)

②5 'I don't understand.' 'Don't you? I'm sorry.' (ibid.)

②6 'Their daughter isn't very clever.' 'Isn't she?' (Quirk et al. 1985: 812)

このタイプの疑問文は上昇調で発話され、話し手の驚きを表す。否定陳述の bias は否定で、否定の疑問文の bias は一般的に肯定である。否定陳述で表される相手の見解と否定の応答で表される話し手の見解の間にずれがあるので、話し手の驚きを表すことになる。

(D) 否定陳述×肯定応答 (-) × (-)

このタイプはタイプ (A) の裏返しで、陳述と応答の bias のいずれも否定で一致しているので、理論上は話し手が相手の見解に同意していることになる。しかし、今のところ実例は見つかっていない。²

6. 否定の平叙疑問文

平叙文の語順で文末を上昇調にすることで、その平叙文は疑問文と同じような機能を果たせるが、yes-no 疑問文とはどのような点で異なるのであろうか。³

肯定の平叙疑問文では、話し手はあらかじめ yes の答を仮定している感じがして、肯定の bias を強める (Leech & Svartvik 1975: 127, 2002: 132)。一方、否定の平叙疑問文では no の答を期待しており、典型的には命題内容を確認する機能をもつが、確信の度合いは状況に応じて変化する (Quirk et al. 1985: 814, Leech & Svartvik 2002: 132, Huddleston & Pullum 2002: 881)。

次例は、殺人現場にやって来た捜査支援課の責任者が、現場にいる刑事に捜査状況を尋ねる場面である。検死官が現場の写真を撮りはしたが、誰も現場の物には触れていないと刑事は言っている。

②7 "Where is everybody?"

“A couple of the boys are in the kitchen. And one or two’s poking around the yard in the woods out back.”

“But they haven’t been upstairs?” (P. Cornwell, *The Body Farm*)

話し手は捜査員は台所や庭にいるという旨の発言を聞いて、先に刑事は誰も何にも触っていないと言っただから、殺人が行われた二階には「誰も上がっていない」と考え、そのことを確認している。

次例は、テネシー大学付属腐敗研究所長の Dr. Shade がある犯罪科学者の行った実験を見たいと言う場面である。

(28) “Your experiment’s ready, and I’m eager to take a look.” Shade got up from his chair.
“You haven’t looked yet?” (P. Cornwell, *The Body Farm*)

Dr. Shade が実験を見たいと発言したことから、話し手は「ドクターはまだ実験を見ていない」ことを知って、そのことを確認している。

次例は、弁護士の Rusty が殺された検事の元夫を訪ねる場面である。

(29) Rusty: Mr. Polhemus? I’m Rusty Sabich.
Mr. Polhemus: Seems so strange to be talking about her after all these years.
Rusty: You haven’t had much contact with her, then?
Mr. Polhemus: None, since she left. (*Presumed Innocent* [映画台本])

元夫は元妻と別れてかなり経っていて (after all these years)、しかも彼女は殺されてこの世にいないのに、初対面の人と彼女の話をするのは奇妙なものだと発言したのを受けて、話し手はそれでは (then) 「彼女とあまり連絡を取らなかったのだろう」と推測して、そのことを確認している。

いずれの場合でも、否定平叙文で表されている内容を話し手が確認するのに十分な証拠が相手の発話などによって直前に提示されている。したがって、話し手はあらかじめ no の答を期待して、相手に確認していることになる。文脈によっては肯定、否定いずれの epistemic bias ももちうる否定疑問文とは、この点で異なる。

7. おわりに

否定の疑問文には2種類の解釈がある。いずれの解釈をするかは、epistemic bias が肯定か否

定かによる。deontic bias は常に肯定である。epistemic bias が肯定の場合、すなわち、話し手のもつ発話時以前の認識、あるいは、そうあるべきだという発話時の希望的認識と、発話時の現状認識が一致する場合は、否定の疑問文は相手に同意を求めたり、確認したりする機能をもつ。一方、epistemic bias が否定の場合、すなわち、話し手のもつ発話時以前の認識、あるいは、そうあるべきだという発話時の希望的認識と、発話時の現状認識にずれがある場合、否定の疑問文は話し手の驚き・非難・困惑・失望といった感情を表す。いずれの解釈をするかは、話し手があらかじめもっている想定や発話時の状況などを含めて、言語的・非言語的文脈によって決まる。肯定の疑問文とは異なり、否定の疑問文は強い bias をもち、話し手の態度が明確に表明される。

また、yes-no 疑問文のもつ bias を応用することで、応答に用いられる短縮形の疑問文の働きも説明できる。さらに、否定の命題を確認する機能をもつ否定の平叙疑問文よりも強い bias をもつ否定の疑問文の方が、話し手の態度がより明確に表明されることもわかる。

注

- 1 Quirk et al. (1985: 812) では、㉔のように肯定文の焦点が gradable unit (ここでは clever) である場合、同意を示すのに下降調の否定の応答を用いることができるとする。
- 2 この理由を探るのに、否定×肯定の付加疑問文に関する次の記述が役立つかもしれない。
It isn't raining again, is it? (Huddleston & Pullum 2002: 894)
このタイプの付加疑問文には、肯定の答が真実であることを話し手が恐れているという暗示があると
するが、このことが否定陳述×肯定応答の実例が見つからないことに何らかの関係があるのだろうか。
- 3 平叙疑問文はくだけたスタイルで多く見られる (Leech & Svartvik 1975: 127, 2002: 132, 村田・成田 1996: 9)。

参考文献

- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. Harlow: Longman.
- Leech, G. and J. Svartvik. 1994, 2002. *A Communicative Grammar of English*. (2nd Edition, 3rd Edition) Harlow: Longman.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 村田勇三郎. 1984. 『文(I)』講座・学校文法の基礎第7巻. 東京: 研究社出版.
- 村田勇三郎・成田圭一. 1996. 『英語の文法』テイクオフ英語学シリーズ第2巻. 東京: 大修館書店.
- 太田朗. 1980. 『否定の意味: 意味論序説』東京: 大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. (2nd Edition) Oxford: Oxford University Press.